



CP領域における主要部要素の配列と分離構造

森山, 倭成

(Citation)

神戸言語学論叢, 13:35-54

(Issue Date)

2022-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81013091>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013091>



CP領域における主要部要素の配列と分離構造

森山 倭成

神戸大学大学院

1. はじめに

日本語における終助詞や丁寧語などの文末形式は、CP領域の統語論研究に対して示唆的な言語事実を提供する。CPは、主要部のCが投射してできた単一の句であると広く仮定されている (Chomsky (1986))。しかしながら、Culicover (1991) や Rizzi (1997) では、CPは多重の投射から構成されているとする分離CP仮説 (split CP hypothesis) が提唱されている。日本語の文末形式に目を向けると、単一CP仮説では正しく捉えられない言語事実が即座に見つかる。例えば、(1) では、時制要素の「た」の右側に複数の文末形式 (「です」・「よ」・「ね」) が表出している。CP領域は時制要素からなるTPより上位の構造位置に存在するので、(1) では、複数の主要部要素がCP領域に起こっているということになる。(1) の例は、CPが単一の句であるのではなく、複数の投射から形成されていることを端的に表している。

(1) 楽しかった-です-よ-ね。

日本語は、SOV言語の特性から、主要部要素の配列を確認するのが比較的容易な言語である。本論では、主節のCP領域に現れる主要部要素の線形順序を手がかりにして、主節領域における分離CP構造を提案する。特に文末要素の「です」・「つけ」・「か」・「よ」・「ね」・「な」の線形順序に注目する。これらの文末要素の語順を整理すると、「です—つけ—か—よ—な・ね」の順に文末要素が並ぶことが明らかとなる。一般に、形態素同士の接続の順序と構造上の階層関係は並行的である (Baker (1985))。日本語は主要部後行型の言語であることから、右側に現れる要素ほどより高い構造位置に現れているといえる。この見方に基づき、本論では (2) のような分離CP仮説を提案する。

(2) [SRP [EP [ForceP [MP [AddrP [TP T] です] つけ] か] よ] な・ね]

SRP (Soliciting Response Phrase) は聞き手への応答要求に関わる語が現れる投射である。主要部には「な・ね」が起こる。EP (Emphasis Phrase) は命題内容を強調する働きを持つ「よ」が起こる投射である。ForcePは文のタイプの指定 (平叙文・疑問文・命令文など) に関わる投射で、主要部には疑問を表す「か」が起こる。MP (Modal Phrase) は話し手の判断に関わ

るモダリティ要素が起こる投射で、主要部には「つけ」が生じる。AddrPは、聞き手の属性や聞き手との関係（親疎や上下関係など）の指定に関与する投射であり、時制要素の右隣に生起する丁寧語の「です」が主要部に現れる。

さらに、本論では生成文法の先行研究でほとんど議論されてこなかった終助詞の「もん（もの）」の統語特性を記述し、「もん」はMからEへの主要部移動を起こす要素であると主張する。他の主要部要素との共起制限からこの仮説が妥当であることを示す。

本論の議論は以下のように進める。2節では、日本語のCP研究の現状を整理し、先行研究の要点と問題点をまとめる。3節では、文末要素の「です」・「つけ」・「か」・「よ」・「ね」・「な」の線形順序を確認し、日本語のCP領域は [SRP [EP [ForceP [MP [AddrP [TP ……]]]]]] の階層構造を持つことを提案する。4節では、終助詞の「もん」の統語的振る舞いを観察し、この終助詞は主要部移動によりMPの主要部からEPの主要部に移動すると主張する。5節は本論のまとめである。

2. 日本語の文末形式とカートグラフィ

2.1. 三タイプの文末形式

日本語のCP研究では、丁寧語・モダリティ要素・終助詞・補文標識が個別的に研究されてきた。本論では、主節領域における分離CP構造を明らかにすることを目的としているので、補文標識を除く丁寧語・モダリティ要素・終助詞に焦点を当てる。

まず、丁寧語にはTPの下位に生起するもの（丁寧語A）とCP領域に基底生成されるもの（丁寧語B）とがある（Miyagawa (1987); 森山 (To appear)）。(3) に示すように、名詞文や動詞文では、丁寧語Aの「です」や「ます」が時制要素の「た」の左側に起こる。

- (3) a. ケントは学生でした。 b. ケントは帰りました。

また、日本語の時制要素には、過去時制の「た」に加え、従属節や補文節を導入する「て」もある（Nakatani (2013)）。丁寧語Aの「です・ます」が時制要素の「て」の後続を許すことを (4) は示している。

- (4) a. ケントは小学生でして、ナツコは中学生です。
b. ご一緒させていただきまして、ありがとうございました。

これに対して、時制要素に付く丁寧語Bの「です」では、時制要素の後続が不可能である。(5a) では、下線が引かれている時制要素の「た」が「です」に接続しているが、不適格な文である（辻村 (1967)）。(5b) では、同じく時制要素の「て」が「です」に接続しており、

非文である。このように、丁寧語Bが丁寧語Aとは異なる統語特性を示すことが (5) の例から示唆される。

- (5) a. *その問題は難しかったでした。
 b. *その問題は難しかったです、解けませんでした。

丁寧語Bが時制要素の後続を許容しないのは、丁寧語Bの「です」がCP領域に基底生成されるためである (森山 (To appear))。「です」は時制要素の右隣に生起するので、その相対的語順から、TPの上位、すなわちCP領域に基底生成されていることがわかる。そして、時制要素の「た・て」はTPの主要部であり、述語に相当する句 (vPなど) をその補部を取る。そうすると、丁寧語Bに「た・て」が接続できないのは、時制要素がCP領域の要素を補部を取れないからであるということができる。一方で、丁寧語Aでは時制要素の後続が許容される。これは、述語が投射する句の内部にこれらの丁寧語が基底生成されるからである。このタイプの丁寧語はTPの下位に生成されるので、「た・て」の後続を許すのである。丁寧語に関するこれまでの統語論研究では、丁寧語Aのデータに基づいて議論が展開されてきた (Miyagawa (1987, 2012, 2017); Kishimoto (2013a, b); Yamada (2019))。これに対して、CP領域に基底生成される丁寧語Bに焦点を当てた研究は、管見したところ、ほとんど皆無に近い。本論では、CP領域に起こる主要部要素の線形順序に注目するので、主にはCP領域に外的併合される丁寧語Bを用いて議論を展開する。

次に、モダリティ要素については、MP (Modal Phrase) という投射と関係付けられると提案されている (Koizumi (1993); 上田 (2007); 岸本 (2011) など)。(ただし、ModP, ModalP, MoodPなど文献ごとに表記にばらつきがある。) (6a) に例示されるように、話し手の判断を表すモダリティ要素の「だろう」が終助詞の「か」と共起できることから、Koizumi (1993) は、CP領域をMPとCPに二分割している。(6b) のように、「だろう」はMPの主要部として、「か」はCPの主要部として起こる。

- (6) a. 太郎は来る-だろう-か。 b. [CP [MP [TP] *daroo*] *ka*]

最後に、終助詞については、Saito and Haraguchi (2012) に重要な観察がある (Endo (2007), 遠藤 (2010) も参照)。(7a) のように、「わ」・「よ」・「ね」がこの語順で現れることから、(7b) のような階層構造が仮定されている。「わ」は構造的に最も下位に現れ、次に「よ」、最上位に「ね」が現れる。

- (7) a. そうだった-わ-よ-ね。
 b. [[[TP ...] Assertion (-wa)] Assertion (-yo)] Soliciting Response (-ne)]

以上のように、主節のCP領域に関する研究では、丁寧語・モダリティ要素・終助詞が研究されてきた。しかしながら、これら三つの文末形式を統一的に説明することはこれまで積極的には行われてこなかった。本論の目的は、三種類の文末要素を統一的に捉える階層構造を提案することである。



2.2. CP領域の階層構造とカートグラフィー

日本語のCP研究には、カートグラフィーの枠組みに依拠したものが多い。特に、(9) に示される Rizzi (1997) の階層構造が前提とされることがしばしばある。ForcePは、CP領域の投射に位置する投射であり、文のタイプの指定に関与する。TopP*は、FocPの上位と下位に投射され、題目化 (topicalization) に関与する。(TopP*の右肩のアスタリスク (*) はTopPが多重に投射可能であることを示している。) FocPは、焦点化 (focalization) に関わる投射である。FinPは、CP領域の最下位に投射され、節の定性 (finiteness) の指定に関与する。

(9) [ForceP [TopP* [FocP [TopP* [FinP [TP]]]]]]

Hiraiwa and Ishihara (2012) は、日本語のCP構造として、(10) のような階層構造を想定している (遠藤・前田 (2020) も参照)。TopPの構造位置は異なっているが、CP領域がForceP, TopP, FocP, FinPから構成されている点では、Rizzi (1997) と共通している。

(10) [TopP [ForceP [FocP [FinP [TP]]]]]

しかしながら、Rizzi (1997) のカートグラフィーは、主にイタリア語のデータに基づいて提案されたものであるから、日本語のCP領域がRizzi (1997) が提案するような階層構造を持っているとは限らない。

また、遠藤 (2010) は、Cinque (1999) のカートグラフィーを終助詞の階層構造に応用している。Cinque (1999) は、副詞の線形順序に着目し、(11) のような階層構造を提案している。TPの上位には、Mood_{speech act} (発話行為に関する句), Mood_{evaluative} (評価に関する句), Mood_{evidential} (証拠性に関わる句), Mod_{epistemic} (認識的モダリティに関する句) が投射する。

(11) [*frankly* Mood_{speech act} [*fortunately* Mood_{evaluative} [*allegedly* Mood_{evidential} [*probably* Mod_{epistemic} [*once* T (Past) ...]]]]] (Cinque (1999: 106) より一部抜粋)

(11) の階層構造を前提に、遠藤 (2010) は、終助詞の「わ」・「な」・「よ」・「ね」に対して、(12) のような階層関係を提案している。「わ」はMod_{epistemic}、「な」はMood_{evidential}、「よ」はMood_{evaluative}、「ね」はMood_{speech act}に配置される。

(12) [[[[[.....] わ_{Epistemic}] な_{Evidential}] よ_{Evaluative}] ね_{Speech-Act}]

しかし、この分析にはいくつかの問題がある。まず、他言語の特徴に動機付けられた (11) の階層構造を日本語に敷衍している点である。(11) の階層構造が日本語でも成り立つことをCinque (1999) と同じように副詞を用いて示すのも一つの方向性ではあるが、日本語は自由語順を許す言語なので、副詞のデータは有効でない可能性がある。(13) は副詞の「幸運にも」と「昨日」の語順を調べたものである。(11) の階層構造に基づく、「幸運にも」はMood_{evaluative}、「昨日」はT (Past) と関係付けられる。(11) の階層関係が正しければ、「幸運にも昨日」の語順でのみ容認されることが予測される。実際、(13a) は容認可能である。

(13) a. 幸運にも昨日彼に会えた。 b. 昨日幸運にも彼に会えた。

ところが、(13b) から分かるように、反対の語順でも容認される。日本語では自由語順の特性が関与してくるため、副詞の語順からはCinque (1999) の階層構造が日本語でも成り立つかどうかを検証することはできない。

次に、この分析は、(14a) が文法的になることと (14b) が非文になることを誤って予測する。(12) によれば、「な」は「よ」・「ね」より下位の投射に位置付けられるので、「なよ」・「なね」の語順が容認されることが予測される。しかし、(14a) から明らかであるように、非文となる。加えて、(12) に従うと、「よ」は「な」より上位の構造位置に現れるので、「よな」の語順では容認されないはずである。しかし、(14b) のように、実際には容認可能である。

(14) a. *太郎は学生だ {なよ／なね}。 b. 太郎は学生だよな。

ここまで見てきたように、カートグラフィーの枠組みに基づくCP研究では、他言語の特徴に動機付けられた階層構造を日本語に当てはめる取り組みがなされてきた。一方、日本語の言語事実をベースとして階層構造を構築することはあまり行われていない。これからのCP研究においては、日本語の言語事実に基づいた分離CP構造の研究が必要である。

もっとも、日本語のデータを扱った文末領域の研究が全くの皆無であるわけではない。澤田 (1993: 167) は「重層モデル」と呼ばれる階層構造を提案している。(15) の構造において、VPには動詞述語が現れる。S⁰は、現在の統語論において時制の指定に関与するTPに相

当する投射である。次に、S¹は話し手の判断を表すモダリティ要素が現れる投射であり、「だろう」や「まい」などが表出する。最後に、S²は終助詞が置かれる投射である。

(15) [S² [S¹ [S⁰ [VP ... V⁰] Tense (る、た)] Modal ((よ) う、だろう、まい)] Prt (終助詞)]

澤田 (1993) の研究は日本語のデータに動機付けられた階層構造を提案している点で重要であるが、(15) の構造において丁寧語がどこに位置付けられるのかという点や終助詞を一つの投射にまとめてよいのかという点が疑問として残る。

3節では、文末要素の「です」・「つけ」・「か」・「よ」・「ね」・「な」に着目し、日本語の言語事実に応じた動機付けられた分離CP構造を提案する。なお、本論ではカートグラフィーの枠組みを採用していないため、カートグラフィー研究で当然のこととされている理念や仮定に必ずしも従っていないことがあることに注意されたい。

3. 線形順序と階層構造

日本語には文末形式が豊富に存在しそれぞれが特異な特性を有しているため、それらの文末形式の間に一貫した法則性を見出すことは容易ではないが、一部の文末形式に焦点を当てることで、CP領域の分離構造を特定することが可能になる。以下では、文末要素の「です」・「つけ」・「か」・「よ」・「ね」・「な」を取り上げ、「です—つけ—か—よ—な・ね」の語順で右周辺部にそれぞれの文末要素が配列されることを確認する。さらに、その順序関係に基づいて、日本語のCP領域は [SRP [EP [ForceP [MP [AddrP ...]]]]] の階層構造を持つと提案する。

本節では、文末要素の「です」・「つけ」・「か」・「よ」・「ね」・「な」を考察の対象とする。(16) に具体例を提示しているように、どの文末要素も時制要素の「た」の右側に生起することができる。(16a) の「つけ」は、忘れていたことを話し手が想起する際に用いられる終助詞である。(16b) の「か」は、疑問を表す終助詞である。(16c) の「よ」は、命題内容の強調を表す終助詞であり、「ね・な」は、聞き手に応答を促す機能を持つ終助詞である。(16d) は丁寧語Bの「です」である。

- (16) a. 昨日ってエイプリルフールだったつけ? b. もう飯は食ったか。
c. 面白かった {よ/ね/な}。 d. ハルコは優しかったです。

次に、それぞれの文末要素の線形順序を記述する。まず、丁寧語Bの「です」は、他の文末要素の左隣に現れなければならない。文末要素の左隣に丁寧語Bが現れる語順でのみ文が容認されることを (17) は表している。「です」は終助詞の「な」とはやや共起しにくい、「*なです」の語順と比べれば、容認度は「?ですな」の語順の方が高い。

- (17) a. ハルコって優しかった {ですっけ／*っけです}。
b. ハルコは優しかった {ですか／*かです}？
c. ハルコは優しかった {ですよ／*よです}。
d. ハルコは優しかった {ですね／*ねです}。
e. ハルコは優しかった {?ですな／*なです}。

次に、終助詞の「っけ」は、「です」を除く他の文末要素の左側に生起しなければならない。(18a, c, d) に示されるように、「っけ」は「か」・「ね」・「な」の左隣に現れている。反対の語順では容認されない。

- (18) a. 何だ {っけか／*かっけ}。 b. 何だ {?*っけよ／*よっけ}。
c. 何だ {?っけね／*ねっけ}。 d. 何だ {っけな／*なっけ}。

一方で、語順にかかわらず終助詞の「よ」とは終助詞の「っけ」が共起できないことが (18b) からわかる。この共起制限は意味的な要因によるものである。終助詞の「よ」は、命題内容を断定的に伝達する意味を持つ。これに対して、終助詞の「っけ」は、記憶が曖昧になっている事柄を確認する意味を持つ。「よ」の持つ断定性と「っけ」の持つ曖昧性が意味的に矛盾するため、「よ」と「っけ」は共起できないのである。

続いて、疑問を表す終助詞の「か」は、終助詞の「よ・ね・な」の左隣に現れなければならない。(19) に見られるように、逆の語順では容認されない。

- (19) a. 本当 {かよ／*よか}。 b. 本当 {かね／*ねか}。 c. 本当 {かな／*なか}。

終助詞の「よ」・「ね」・「な」については、Saito and Haraguchi (2012) が語順制限を観察している。(20) のように、「よ」は「ね・な」の左方に生起し、反対の語順では容認されない。

- (20) a. 冗談だ {よね／*ねよ}。 b. 冗談だ {よな／*なよ}。

さらに、(21) に示されるように、「ね・な」は語順に関係なく共起できない。「ね」と「な」は、どちらも聞き手に反応を促すような機能を持つので共起しないものと考えられる。

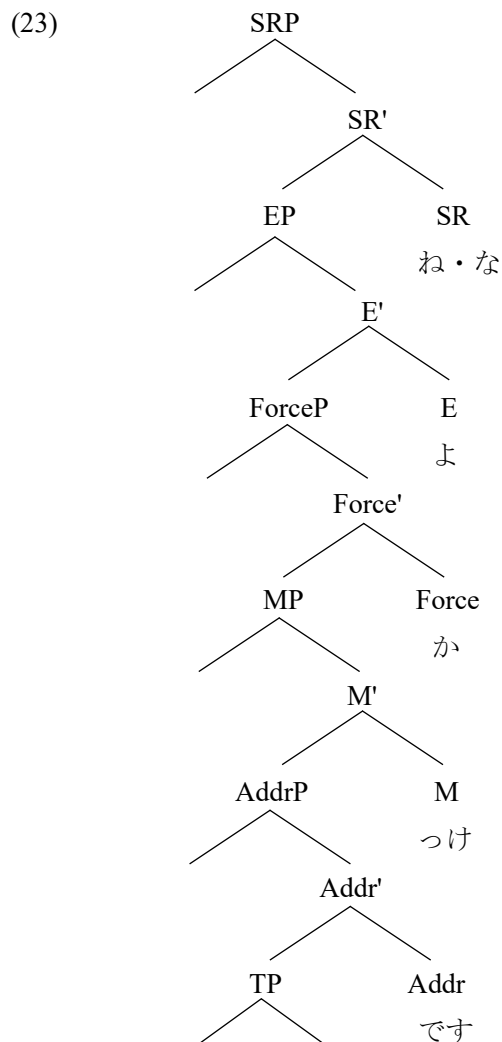
- (21) *学生だ {ねな／なね}。

(17) から (21) までの線形順序を整理すると、(22) のような順序関係が成り立っていることがわかる。

(22) です—つけ—か—よ—な・ね

日本語のような主要部後行型の言語では、主要部 α が主要部 β に先行する場合、 β は α よりも高い構造位置に現れることが知られている (Baker (1985))。そうすると、(22) の線形順序から、線形的に左端に表出する丁寧語Bの「です」は、CP領域の最下位に現れており、右端に表出する「な・ね」は、最上位に現れていることが示唆される。

本論では、日本語のCP領域は (23) の五階建ての階層構造を持つと提案する。SRP (Soliciting Response Phrase) は、応答要求に関わる投射であり、終助詞の「な・ね」が主要部に現れる。(Soliciting Responseという用語はSaito and Haraguchi (2012) に拠る。) EP (Emphasis Phrase) においては、命題内容を強調する働きを担う「よ」が主要部に起こる¹。



ForcePは、文のタイプ (平叙文・疑問文・命令文・感嘆文など) の指定に関わる投射である (Rizzi (1997))。ForcePの主要部には、疑問を表す終助詞の「か」が起こる。(ForcePの主

要部には、命令・禁止を表す語（禁止を表す「な」など）も生起すると考えられるが、本論では、「か」を用いて議論を進める。）

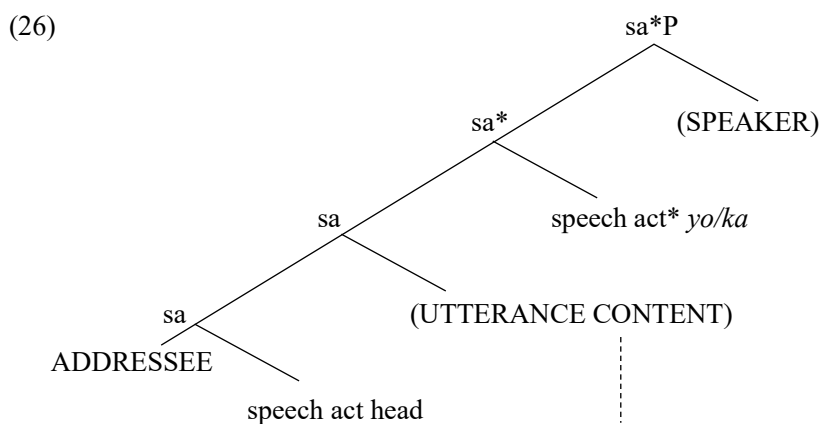
ForceP・EP・SRPを分離せず、一つの投射に集約する可能性もありうる（澤田（1993））。(24)のように、「か」・「よ」・「ね」・「な」を同一の投射に置く可能性である。この代案のもとでは、終助詞が共起した「かよ」・「かな」・「かね」・「よね」・「よな」は一語化した終助詞として分析される。

(24) [ZP [MP ……]] か／よ／ね／な／かよ／かな／かね／よね／よな]

ところが、この分析では、(25) のように、「*よか」・「*なか」・「*ねか」・「*ねよ」・「*なよ」の語順が容認されないことを説明できない。(24) のような分析では、(25) が容認されないのは単なる偶然であるということになる。他方、ForceP・EP・SRPに分離する本論の分析では、(25) の非文法性に構造的な説明を与えることができる。

- (25) a. *冗談だよか。 b. *冗談だなか。 c. *冗談だねか。
d. *冗談だねよ。 e. *冗談だなよ。

また、Tenny (2006) は、話し手と聞き手の発話行為に關与する投射として、Speech Act Phraseを仮定している。(26) に示されるように、Speech Act Phraseには三つの項が現れる。最上位には発話行為の動作主 (agent) にあたるSPEAKERが表示される。さらに、目標 (goal) としてADDRESSEE、主題 (theme) としてUTTERANCE CONTENTが表示される。Tenny (2006: 263) では終助詞の「よ」と「か」はどちらもspeech act*に生起すると想定されている。



しかし、この分析では「よ」と「か」が共起する「本当かよ」のような文をどのように扱うかについて疑問が生じる。仮に、speech act headに「か」、speech act*に「よ」が現れるとしよう。このようにすれば、共起関係を導くことができる。ところが、そのように仮定す

ると、今度は「本当だよね」のように、「よ」と「ね」が共起できることが問題となる。speech act*の上位には主要部は存在しないので、「ね」が起こる位置が存在しないことになる。

次に、MP (Modal Phrase; Mood Phrase) は、話し手の判断を表すモダリティに関わる投射である。Koizumi (1993) は、(27a) のように、モダリティ要素の「だろう」と終助詞の「か」が共起できることから、日本語の分離CP構造として [CP [MPだろう] か] の階層構造を提案している。本論でも、モダリティ要素に関わる投射としてMPを立てる。

(27) a. ケントは来るだろうか。 b. *ケントって来るだろうっけ。

終助詞の「っけ」は、話し手が記憶の確認を行うときに使用されるので、話し手の判断を表すモダリティ要素である。このことから、「っけ」はMPの主要部であると仮定する。「っけ」は「だろう」と同じ主要部位置を占めるので、(27b) に示すように、両者は共起できない。

最後に、AddrPは聞き手の属性や聞き手との関係 (親疎や上下関係など) の指定に関与する投射である (Yamada (2019))。「です」は聞き手への敬意を表すので、AddrPの主要部であると仮定する。(23) に示されるように、AddrPは、CP領域において最も低い構造位置に投射する。先行研究では、本論の提案とは異なり、丁寧語 (またはアロキュティブ探査子²) は疑問を表す助詞の「か」より構造的に高い位置に移動するとする分析が提案されている (Miyagawa (1987, 2012, 2017); Kishimoto (2013b))。Miyagawa (2012, 2017) やKishimoto (2013b) では、(28) に示すように、丁寧語 (またはアロキュティブ探査子) はCP (ForceP) より上位のSpeech Act Phrase (発話行為句) に非頭在的に動くと言われている。

(28) [Speech Act Phrase [CP [TP ... T] C] Speech Act]

↑ ↖
「か」 丁寧語

この分析では、終助詞の「か」はCP (ForceP) の要素であると想定されている。したがって、丁寧語は「か」が投射する句よりも上位の投射との関係を持つ要素であることになる。

これらの先行研究では、TPの下位に基底生成される丁寧語Aが用いられている。このため、これまでの研究では、線形順序からはCP領域において丁寧語の構造位置を特定することが困難であった。しかしながら、CP領域に起こる丁寧語Bと他の主要部要素の線形順序を観察すると、以下に再掲する (17b) のように、丁寧語Bの「です」は「か」の左隣に現れるので、「です」は「か」より構造的に低い位置に存在することが示唆される。

(17b) ハルコは優しかった {ですか/*かです} ?

Miyagawa (2012, 2017) やKishimoto (2013b) の分析では、「*かです」の語順が容認されても問題ないはずである。Speech Act Phrase仮説を正当化するためには、(17b) において「*かです」の語順が容認されない理由を説明する必要がある。本論では、丁寧語Aおよび丁寧語Bは、Speech Act Phraseではなく、AddrPによる認可を受けると仮定する。

(17b) において「*かです」の語順が不適格になるのは構造的な要因ではなく形態的要因によるものであると考えたくなるかもしれない。しかしながら、「かです」の語順は (29A) のようなケースでは容認可能である。(29A) の下線部では、文末に「です」が現れており、「かです」の語順が実現している。

(29) Q: ケントが知りたがっているのはどんなことですか?

A: *pro* 地球がどのようにしてできたかです。

このように、「かです」の語順は環境によっては容認されるので、(17b) の「*かです」の語順は形態的な制約では排除できない。(17b) の順序関係は、(23) の階層構造から捉えられるべきである。丁寧語が助詞の「か」より構造的に高い投射と関係付けられるとする従来の分析では、(17b) において「*かです」の語順が容認されないことを正しく説明できない。

また、MPの主要部の「だろう」は丁寧語と共起できない。(30) では、「だろう」がAddrPによる認可を受ける「ます」と共に現れており不適格な文となる。この共起制限は「だろう」の選択制限によるものである。言うまでもなく、日本語の文には常に丁寧語が生起するわけではない。そうすると、「ケントが帰った」のように丁寧語が生起しない文では、AddrPが現れるのかという点が問題となる。本論では、AddrPは丁寧語が生起した時のみ投射すると仮定する。(否定辞が生起した時のみ、NegPが投射されることに類似している。)

(30) *ケントは帰りましただろう。

「だろう」はAddrPを選択することはできず、TPのみを選択する語であると仮定すると、(30) において、「だろう」が丁寧語と共起できないことを捉えられる。同じくMP主要部である「っけ」は、丁寧語との共起が可能なので、TPだけでなくAddrPも補部に取れる一方で、「だろう」はTPのみしか選択できない。

次に、Rizzi (1997) のカートグラフィーとの比較を行う。(31a) はRizzi (1997) の階層構造であり、(31b) は本提案である。ForcePを立てる点では両者は共通している。一方で、本論では日本語のCP領域にTopP・FocP・FinPを想定していない。

(31) a. [ForceP [TopP* [FocP [TopP* [FinP [TP]]]]]]] b. [SRP [EP [ForceP [MP [AddrP [TP]]]]]]]

先行研究では、「太郎が食べたのはたこ焼きだ」のような文に現れる名詞化辞 (nominalizer) の「の」がFin主要部であると仮定されることが多い (Hiraiwa and Ishihara (2012); Saito (2015))。しかし、「の」が節の定性 (finiteness) を指定しているかどうかは不明確である。なぜなら、FinPの主要部以外であっても定形節のみに後続するCP要素は数多く存在するからである。例えば、終助詞の「よ」や「ね」は定形節に後続するが、CP領域においてはかなり上位の構造位置に生起する。このことは、定形節に後続することがFin主要部であることの証拠とはならないことを示している。このため、「の」のデータはFinPを立てる積極的な根拠とはならない。本論では、「の」はFinPではなくMPの主要部であると仮定する (Simpson (2003) も参照)。この分析は、分裂文の前提節に丁寧語が表出可能であることから裏付けられる (森山 (To appear))。 (32a) に示されるように、分裂文の前提節では丁寧語の「ます」の埋め込みが可能である。「の」がCP領域の最下位に存在するFinPの主要部なのであれば、CP領域の他の主要部の埋め込みは不可能であると言える。「の」節にAddrPによる認可を受ける丁寧語が生起できることから、分裂文に現れる「の」はAddrPまたはTPを補部に取りMPの主要部であると考えることができる³。

- (32) a. 本日私がご紹介しますのはこちらのトースターです。
 b. *太郎が読むだらうのはこの本だ。
 c. *太郎が読む {よ/ね/な} のはこの本だよ。

「の」は、MPの主要部なので、(32b) や (32c) のように、MPからSRPまでの要素を補部位置に生起させることはできない。

続いて、FocPに関しては、日本語ではFocPの主要部に相当する語が存在しないことや顕在的な焦点移動が起こらないことから不要であると考えられる。(Hiraiwa and Ishihara (2012) による「だ」のFoc主要部分析への反論に関しては森山 (To appear) を参照。) 最後に、日本語では題目化 (topicalization) が起こるので、TopPが存在すると考えられないわけではない。しかし、岸本 (2011) は題目化とモダリティ要素が統語的に並行的な振る舞いを示すことから、題目化はMPの指定部をターゲットとして起こると提案している。本論においてもこの仮定を採用する。そうすると、TopPを立てる必要もないということができる。

本節の議論を終える前に、埋め込み節を導く補文標識と本節で提案した階層構造の関係について付言する。日本語の補文標識には、「の」・「こと」・「ように」・「と」・「か」がある。「の」については、上述の通り、MPの主要部であると仮定する。さらに、「こと」と「ように」も同様にMPの主要部であると考えられる。(33a) および (34a) は、「こと」節と「ように」節に丁寧語が表出できることを示している。

- (33) a. 益々ご活躍されますことをお祈りいたします。
 b. *益々ご活躍されるだらうことをお祈りいたします。

c. *益々ご活躍される {よ/ね/な} ことをお祈りいたします。

- (34) a. 今後ともご協力頂きますようにお願い申し上げます。
 b. *今後ともご協力頂くだろうようにお願い申し上げます。
 c. *今後ともご協力頂く {よ/ね/な} ようにお願い申し上げます。

対照的に、MPからSRPまでの要素が生起できないことが (33b, c) と (34b, c) の例から分かる。「こと」と「ように」はAddrPまたはTPを補部選択するMPの主要部であると仮定すると、(33) と (34) の事実を捉えられる。(なお、「の」・「こと」・「ように」の上位には、ForceP・EP・SRPは投射しない。主節の動詞がMPをC選択した時に、「の」・「こと」または「ように」が補文標識として現れると想定する。)

次に、補文標識の「と」が導く補文節にはAddrPからSRPまでに現れる全ての要素を生起させることができる。Saito (2015) は、引用を表す「と」はReportPの主要部であるとしている。本論においても、この仮説を採用する。ReportはSRPの補部選択が可能である。

- (35) a. 太郎は花子が来なかったですと言った。
 b. 太郎は花子は来る {だらう/っけ} と言った。
 c. 太郎は花子は来ます {か/よ/ね} と言った。

最後に、「か」節は特殊な構造を持つ。(36) に見られるように、補文標識の「か」は、AddrP・MP・EP・SRPの要素と共起できない。「か」は疑問節であることを指定する語なので、ForcePの主要部であると考えられる。にもかかわらず、主節に現れる終助詞の「か」とは異なり、MPやAddrPの要素を節の内部に生起させることは不可能である。

- (36) a. *太郎は花子が来なかったですか聞いた。
 b. *太郎は花子が来る {だらう/っけ} か聞いた。
 c. *太郎は花子が来る {よ/ね} か聞いた。

本論では、埋め込み節を導入する「か」はTPを選択するForcePの主要部であると仮定する。主節においては「か」はMPを選択するが、(37) のように、埋め込み節の「か」はTPを選択する⁴。このため、埋め込み節の「か」はAddrPやMPと共起できないのである。(補文標識の「か」が投射するForcePの上位にはEP・SRPは投射しないと想定する。)

- (37) [ForceP [TP] *ka*]

ちなみに、「太郎は誰が来たのか知らない」のように、「か」の直前に「の」が起こる場合がある (Saito (2015))。一見したところ、Force主要部の「か」がMP主要部の「の」を選択しているように見えるが、「太郎は誰が来たのだか知らない」のように、「の」と「か」の間にコピュラの「だ」が生じることができる。このことは、「太郎は誰が来たのか知らない」のような文が「のだ」文の「だ」が脱落することで得られる文であることを示している。このため、このケースにおいて「か」はMPを選択しているのではない。

以上、本節では、日本語のCP領域は五階建ての分離CP構造を持つと論じた。この仮説は、文末要素の線形順序から支持が得られる。本節の議論は、日本語の言語事実に裏付けられた新たな階層構造を提案している点で意義を持つ。

4. 主要部移動

3節で提案した階層構造を仮定することで、これまでの統語論研究ではほとんど分析が与えられてこなかった文末形式の統語特性を捉えることが可能になる。本節では、終助詞の「もん (もの)」を取り上げ、この終助詞がMPからEPに主要部移動することを示す。(38a)に、終助詞の「もん (もの)」の例文を提示している。終助詞の「もん」は理由付けを表すため、同じく理由付けを表す副詞の「だって」と共起しやすい。また、(38)の対比が示しているように、形態的には「もん」は終止形接続である。

- (38) a. だって大変だもん (もの)。 b. *だって大変なもん (もの)。

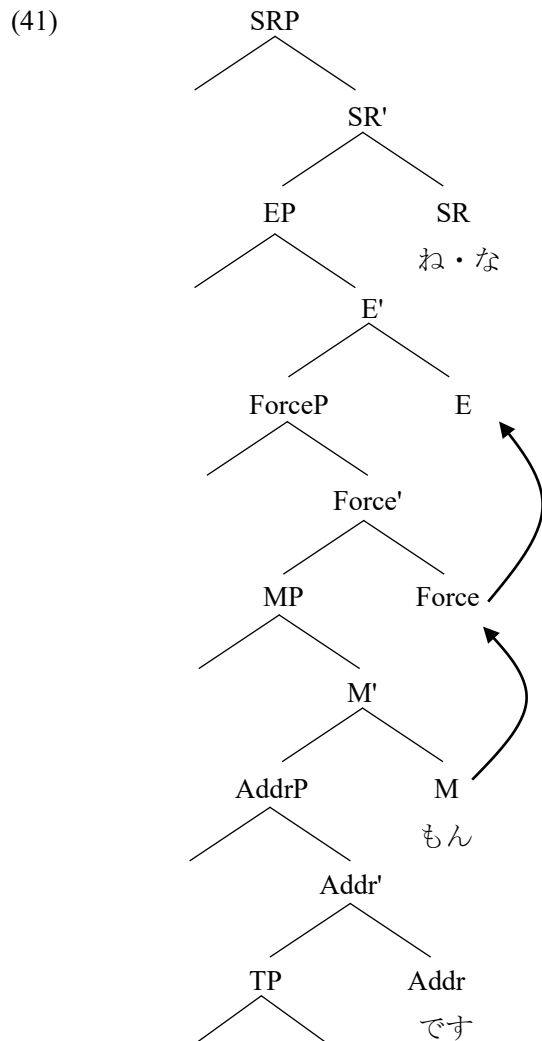
終助詞の「もん」に類似した形式にモーダル述語の「もんだ」や修辭疑問の「もんか」がある。しかしながら、(39)からわかるように、これらの形式は連体形接続なので、終助詞の「もん」とは別個の形式である。

- (39) a. 人生は大変 {な/*だ} もんだ (ものだ)。
b. 人生が大変 {な/*だ} もんか (ものか)!

ここで、3節で見たAddrPからSRPまでの主要部要素との共起関係を調べると、「もん」はAddrPとSRPの要素とは共起できるが、それ以外のCP領域の要素とは共起できないことが明らかになる。(40a)では、「もん」が丁寧語に後続する語順でのみ容認されている。対照的に、(40f, g)では、「もん」が丁寧語に前接する語順でのみ適格となる。しかしながら、(40b-e)からわかるように、MP主要部の「だろう・つけ」、ForceP主要部の「か」、EP主要部の「よ」とは同時に起こらない。(「*だろうもん」が許容されないことについては、日本語記述文法研究会 (編) (2003: 279) にも記述がある。)

- (40) a. だって面白かった {ですもん／*もんです}。
 b. だって面白かった {*だろうもん／*もんだろう}。
 c. だって面白かった {*っけもん／*もんっけ}。
 d. だって面白かった {*かもん／*もんか}。
 e. だって面白かった {*よもん／*もんよ}。
 f. だって面白かった {*ねもん／もんね}。
 g. だって面白かった {*なもん／もんな}。

そうすると、次に問題となるのは、このような言語事実を理論的にどのように説明するかである。本論では、(40) の例文で観察される共起制限は、主要部移動によって説明されるべきであると主張する。(41) の樹形図が示しているように、終助詞の「もん」はMPの主要部として生起し、ForcePの主要部を経由して、EPの主要部へと移動する。



「もん」がMPの主要部であると仮定すると、「だろう・つけ」と共起できないのは、主要部の競合によるものであるということが出来る。

さらに、本論では、主要部移動の移動先に異なる主要部要素が生起することはできないと想定する。ForceP主要部の「か」やEP主要部の「よ」が「もん」と共起できないのは、「もん」の移動先には異なる主要部要素を置くことができないからである。また、この分析は、「です」や「ね・な」と共起するときの順序関係も正しく予測する。AddrPはMP・ForceP・EPの下位に投射するので、「ですもん」の語順のみが許されるということが出来る。加えて、「もんね」・「もんな」の語順が許されるのは、MP・ForceP・EPがSRPの下位の構造位置に投射するからである。

主要部移動の移動先に他の要素が現れてはならないという点は、英語の主要部移動に関するデータから支持が得られる。英語では、仮定法の条件節において、従属接続詞の *if* が省略されたときに、TP主要部がCPに移動することがある。(42a) では、接続詞の *if* が生起しているが、(42b) では、*if* が生起するかわりに *should* が節の初頭に移動している。

- (42) a. If anything should happen to you, call the police.
b. Should_i anything t_i happen to you, call the police.

このような倒置が許されるのは、CPに *if* が生起しないケースに限られる。(43) では、*should* がCPの主要部に移動しているにもかかわらず、主要部位置に *if* が現れているため、非文となる。このことは、移動先となる主要部に音声化される異なる主要部要素が起こってはならないことを示している。同じように、日本語の主要部移動にも同様の制約が作用していると考えerことで、終助詞の「もん」の統語特性を捉えることが可能になる。「もん」はMPからEPへの主要部移動の適用を受けるので、MPからEPに起こる他の主要部要素とは共起できないのである。

- (43) *If should_i anything t_i happen to you, call the police.

ちなみに、終助詞の「もん」がMPの主要部である「だろう」と共起できない点は、意味的な要因に帰することはできない。(44) のように、終助詞の「もん」は推量を表す副詞の「多分」や「おそらく」と共起できるからである。「だろう」も推量を表すので、意味の観点からは「だろう」と「もん」は共起してもよいということが出来る。

- (44) トイレットペーパーは今日のうちに買っておいたほうがいいよ。だって、{多分／おそらく} 明日にはなくなってるもん。

(40b) において「だろう」と「もん」が共起不可能であるという事実は、MPの主要部位置を巡って「だろう」と「もん」が競合関係にあることを強く示唆している。一方で、「多分」や「おそらく」はMPを修飾する付加詞なので、「もん」との共起制限は観察されない。

また、「だろう」と同じく推量を表す「かもしれない」では、(45) に見られるように、「もん」との共起が許される (日本語文法記述文法研究会 (編) (2003: 270))。

(45) トイレットペーパーは今日は買わない。だって明日も残ってるかもしれないもん。

これは、「かもしれない」がCP領域の主要部ではなく、TPの下位に起こることによる。(46) に示されるように、時制の対立を持たない「だろう」とは異なり、「かもしれない」は時制要素の「た」の接続を許す (仁田 (1991))。

(46) トイレットペーパーが売り切れるかもしれなかったので昨日のうちに買っておい

た。時制要素はTPを投射する主要部なので、「かもしれない」はTPの下位に生成されていることがわかる。このことから、(47) に示すように、「かもしれない」は複文構造を持ち、TPを補部にとると仮定する。

(47) [SRP [EP [ForceP [MP [AddrP [TP [TPT] *kamosirena-i*]]]]]]]

そうすると、(45) において「かもしれないもん」の語の連鎖が許容されるのは、MPの主要部の競合が生じていないからであると考えることができる。

本節では、終助詞の「もん」はMからEに主要部移動すると論じた。これまでの統語論研究では、終助詞の「もん」の構造はほとんど説明が与えられてこなかった。3節で提示した分離CP構造とCP領域内での主要部移動を仮定することではじめて「もん」の統語特性を捉えることが可能になるのである。

5. まとめ

日本語は、主要部後行型の言語であることから、CP領域の分離構造を解明するのに好都合な言語である。日本語のCP領域に関するこれまでの研究では、丁寧語・モダリティ要素・終助詞が個別的に研究されてきた一方で、それらの研究成果を統合することを試みた研究は手薄である。また、日本語のCP研究では、Rizzi (1997) やCinque (1999) などのカートグラフィの枠組みに基づく階層構造を類推によって日本語の構造に当てはめるということがなされてきたが、他言語の特徴に動機付けられた構造が日本語にも当てはまるとは限らない。本論では、日本語のデータに動機付けを求め、新たな分離CP構造を提案した。

本論では豊富に存在する文末形式のうち、「です」・「っけ」・「か」・「よ」・「な・ね」の語順の制限に焦点を当てることで、[SRP [EP [ForceP [MP [AddrP ...]]]] という五階建ての階層構造を立てることができると主張した。SRPは聞き手への応答要求に関わる語が現れる投射であり、主要部には「な・ね」が起こる。EPは命題内容の強調を表す「よ」が起こる投射である。ForcePは文のタイプの指定に関わり、主要部には疑問を表す「か」が起こる。MPは話し手の判断に関わるモダリティ要素が起こる投射である。主要部には「だろう・っけ」が生じる。AddrPは、聞き手の属性や聞き手との関係の指定に関与する投射であり、日本語では丁寧語の「です」が主要部に基底生成される。さらに、先行研究であまり触れられてこなかった終助詞の「もん (もの)」の統語特性を考察し、「もん」はMPからEPに主要部移動する要素であると主張した。

註

- * 本稿は、審査中の博士論文の内容の一部です。本稿の執筆にあたって岸本秀樹先生にご指導を賜りました。ここに記して御礼申し上げます。本稿は、日本言語学会第163回大会 (2021年秋季大会, オンライン開催) における口頭発表の内容を含んでいます。また、本研究はJSPS科研費JP19J20008の助成を受けています。本稿における不備や誤りは筆者の責任です。
- ¹ EPの機能はFocPの機能と類似しているように思えるかもしれないが、EPはFocPと混同されてはならない。FocPは焦点-前提 (focus-presupposition) の関係を作るのに対して、EPは作らない。
- ² Miyagawa (2012, 2017) では、丁寧語そのものが移動するのではなく、CPの主要部に基底生成されるアロキュティブ探査子 (allocutive probe) がSpeech Act Phraseの主要部に非顕在的に移動すると仮定されている。アロキュティブ探査子は丁寧語の認可に関与する要素である。また、Miyagawa (2012, 2017) においては、Speech Act Phraseは二層から構成されると想定されているが、ここでは簡略化している。
- ³ 分裂文の前提節には丁寧語が表出できる一方で、「のだ」文や知覚動詞の補文節に現れる「の」では丁寧語の表出が許されない (*太郎が来ましたのだ、*私は花子が走っていますのを見ました)。「のだ」文や知覚動詞の補文節に現れる「の」はTPのみを選択すると言える。このことは、TPのみを選択する「の」とTPまたはAddrPを選択する「の」が存在することを示している。
- ⁴ 主節と埋め込み節で「か」の補部選択に差異が生じる要因については今後の課題とする。

参考文献

- 上田由紀子. 2007. 「日本語のモダリティの統語構造と人称制限」長谷川信子 (編) 『日本語の主文現象：統語構造とモダリティ』東京：ひつじ書房. 261–294.
- 遠藤喜雄. 2010. 「終助詞のカートグラフィー」長谷川信子 (編) 『統語論の新展開と日本語研究—命題を超えて』東京：開拓社. 67–94.
- 遠藤喜雄・前田雅子. 2020. 『カートグラフィー』東京：開拓社.
- 岸本秀樹. 2011. 「節の周辺要素—モダリティと題目」武内道子・佐藤裕美 (編) 『発話と文のモダリティ—対照研究の視点から—』東京：ひつじ書房. 115–137.

- 澤田治美. 1993. 『視点と主観性—日英語助動詞の分析—』 東京: ひつじ書房.
- 辻村敏樹. 1967. 『現代の敬語』 東京: 共文社.
- 仁田義雄. 1991. 『日本語のモダリティと人称』 東京: ひつじ書房.
- 日本語記述文法研究会 (編). 2003. 『現代日本語文法4 第8部モダリティ』 東京: くろしお出版.
- 森山倭成. To appear. 「日本語の分裂文の統語特性」 *KLS Selected Papers 4*.
- Baker, Mark. 1985. The mirror principle and morphosyntactic explanation. *Linguistic Inquiry* 16, 373–415.
- Chomsky, Noam. 1986. *Barriers*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Culicover, Peter. 1991. Topicalization, inversion, and focus in English. *Proceedings of the 8th Eastern States Conference on Linguistics*, 46–68.
- Endo, Yoshio. 2007. *Locality and Information Structure: A Cartographic Approach to Japanese*. Amsterdam: John Benjamins.
- Hiraiwa, Ken and Shinichiro Ishihara. 2012. Syntactic metamorphosis: Clefts, sluicing, and in-situ focus in Japanese. *Syntax* 15, 142–180.
- Kishimoto, Hideki. 2013a. Notes on correlative coordination in Japanese. In Yoichi Miyamoto, Daiko Takahashi, Hideki Maki, Masao Ochi, Koji Sugisaki, and Aasako Uchibori (eds.) *Deep Insights, Broad Perspectives: Essays in Honor of Mamoru Saito* Tokyo: Kaitakusha. 192–217.
- Kishimoto, Hideki. 2013b. Coordination and movement of honorific heads in Japanese. *19th ICL Papers*, 7, International Congress of Linguistics, University of Geneva, Switzerland.
- Koizumi, Masatoshi. 1993. Modal phrase and adjuncts. *Japanese/Korean Linguistics* 2, 409–428.
- Miyagawa, Shigeru. 1987. LF affix raising in Japanese. *Linguistic Inquiry* 18, 362–367.
- Miyagawa, Shigeru. 2012. Agreements that occur mainly in main clauses. In Lobke Aelbrecht, Liliane Haegeman, and Rachel Nye (eds.) *Main Clause Phenomena: New Horizons* Amsterdam: John Benjamins. 79–112.
- Miyagawa, Shigeru. 2017. *Agreement Beyond Phi*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Nakatani, Kentaro. 2013. *Predicate Concatenation: A Study of the V-te V Predicate in Japanese*. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Rizzi, Luigi. 1997. The fine structure of the left periphery. In Liliane Haegeman (ed.) *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax* Dordrecht: Kluwer. 281–337.
- Saito, Mamoru. 2015. Cartography and selection: Case studies in Japanese. In Ur Shlonsky (ed.) *Beyond Functional Sequence* New York: Oxford University Press. 255–274.
- Saito, Mamoru and Tomoko Haraguchi. 2012. Deriving the cartography of the Japanese right periphery: The case of sentence-final discourse particles. *Iberia* 4, 104–123.

- Simpson, Andrew. 2003. On the re-analysis of nominalizers in Chinese, Japanese and Korean. In Yen-hui Audrey Li and Andrew Simpson (eds.) *Functional Structure(s), Form and Interpretation: Perspectives from East Asian Languages* London: Routledge Curzon. 131–160.
- Tenny, Carol. 2006. Evidentiality, experiencers, and the syntax of sentience in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 15, 245–288.
- Yamada, Akitaka. 2019. The syntax, semantics and pragmatics of Japanese addressee-honorific markers. Doctoral dissertation, Georgetown University.